説教20210711 アモス7：7-15　マルコ6：7-13

「伝える者の足は美しく」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

聖書において美しさというのは大きなテーマでありますが、果たして主なる神は私たち人間のどこに美しさを見出しているのでしょうか。もっとも、主なる神は人間をよいものとして作られたので、全体的に見れば、私たちはよく、美しいものであることに間違いないですが、それでは、私たちのどの部分が、美しいのか、それについて主なる神はどのように言われているのかを見ていきたいと思います。

　私たちは、美しさを求める存在です。美しい目鼻立ちを求めて、顔に化粧を施したり、あるいは、美しい立ち居振る舞いを求めて、鏡に向かって体の動かし方を研究する方もおられるでしょう。私たちはもともと美しく作られてはいますが、そのように、美しさというのは、どこかの部分にはっきりと現れていないと意味がないといいますか、私たちは美しさを味わうことが出来ないのでしょう。

　以上は、人間の目から見た美しさですが、神の目から見た美しさというのは、それとは違うようです。箴言の最後に次のように記されています。

・「有能な女は多いが／あなたはなお、そのすべてにまさる」と。あでやかさは欺き、美しさは空しい。主を畏れる女こそ、たたえられる。彼女にその手の実りを報いよ。その業を町の城門でたたえよ。

主なる神は「あでやかさは欺き、美しさは空しい」と言われます。つまり先ほど申し上げたような人間的な美しさというのは、ここでは、ほぼ否定されておられます。そうして、「主を畏れる女こそ、たたえられる。」といって、主なる神を恐れることこそ美しさのもとであると言われています。「主を畏れる女」で思い出されるのはエステル妃のことですが、彼女は世に比類のない絶世の美女であったことでしょう。しかし、主なる神の目から見れば、そんなことは関係がなくて、ただ彼女が「主を畏れる女」であったからこそ彼女は主なる神からたたえられる美しい人になったのです。

　さて、最初の問いに戻りますが、主なる神は私たち人間のどこの部分に美しさを見出すのでしょうか。今回、そのことを調べてみましたら、どうやら主なる神は私たち人間の足に美しさを見出しているようです。イザヤ書には次のように記されています。

・いかに美しいことか／山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え／救いを告げ／あなたの神は王となられた、と／シオンに向かって呼ばわる。

山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は美しい、と主なる神は言われます。果たしてこれは見た目のことを言っているのでしょうか。そうではないでしょう。山々を行き巡り歩きとおした人の足は、泥まみれホコリまみれになり、傷ついていたかもしれません。そのような、見た目には美しさなどないと思われる部分に、主なる神は注目されて、あえてそれを美しい脚、とたたえておられるのです。しかもその足の一歩一歩は間違いなく私たちの新しいエルサレムへと向かう足取りの一歩一歩でありましょう。主を恐れ主に従いつつ、泥まみれホコリまみれになっている人の足を、主なる神はこの上なく美しい、と見られているのです。

　さて、今日のマルコ福音書の箇所では、主イエスは、弟子たちに村々を巡り歩いて福音を宣べ伝えるように命じられました。今日は足の美しさに注目していますので、9節に「ただ履物は履くように、」とあるのが気にかかります。この履物というのは原語のギリシャ語では、サンダルとなっていますので、サンダルのような履物であったことでしょう。

　マルコ福音書1章7節に「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。」という洗礼者ヨハネの言葉が記されています。これはどう意味かと申しますと、本来、お客さんの履物のひもを解く役目は、その家の奴隷が担うことだが、主イエスの前では、わたしは奴隷の役目も担うことが出来ないくらい小さいものである、とヨハネは言っているのです。

　これから、弟子たちは村々を巡り、家々を訪ねる訳ですが、その玄関先で、家の者が弟子たちのサンダルをどのように扱うかは、その家の者の様子を知るために非常に有効であったのかもしれません。ですから、主イエスは弟子たちに必要最小限の持ち物を持たせた中で、サンダルだけは欠いてはならないと、釘を刺されたのでしょう。

　次に足が出てくるのは11節です。「足の裏のほこりを払い落としなさい」と知るされていますが、この言葉は皆さんよくご存じなことと思います。しかし、その意味は、分かっているようで分かっていないというのが多くの人の思いではないでしょうか。今日はそこのところを突っ込んで、私なりの黙想をしてまいりたいと思います。

11節には「しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようともしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」とあります。この最初の「しかし」という逆接の接続詞は、もとのギリシャ語では「そして」という並立の接続詞になっています。私たちは、ここを、しかしという強い逆接の接続詞で読みますと、前の10節を否定している内容を想定してしましますが、11節は必ずしも10節を否定している内容ではありません。つまり、「しかし」で読むと、あたかも、11節では、10節でのようには家には入れさせなかったのでは、と思いがちです。しかし、ここを並立の「そして」で読みますと、１０節と11節はつながった内容になって来ます。つまり、あなた方が入った家で、あなたがとどまっていて、そして、もし、あなた方を迎え入れず、耳も傾けない家だとしたら、その場合は、、という意味に読めるのではないでしょうか。

まあ、これについては、註解書をみても、こうだと断言しているものが見当たりませんのでここでも断言は出来ません。しかし、少なくとも、１１節では、弟子たちが門前払いをくらった家、というようなニュアンスではなく、もうちょっと、この家の人と、弟子たちとの、家の中でのやり取りを含んでいることを黙想したほうがよいと思います。

　この受け入れない家の人たちは、訪問した弟子たちと家の中で何日かを共に過ごしたのかも知れません。そしてそのやり取りの後、この弟子たちの話は受け入れられないと、判断したのかも知れません。

　そうすると、「そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落としなさい。」という情景も腑に落ちて来るのではないでしょうか。つまり、この受け入れない家の人たちは、弟子たちが訪問した時、そのサンダルの紐をといて、なかに招き入れたけれども、出発の時には、弟子たちが話した福音を受け取らずに持ち帰らせた、という訳です。弟子たちにしてみれば、せっかく福音を持ってきたのに、受け取られずに持ち帰らせられたとなれば、全くよい思いではなかったことでしょう。そこで、弟子たちがこの家を立つ前に、かわりとして足の裏の埃を、この家に残していく気になるのも分かるのではないしょうか。

　私たちは、この受け入れない家の人たちが、弟子たちをただ門前払いしたのではなく、いろいろと家の中でやりとりをした、ということに思いを致したいと思います。

　この受け入れない家の人たちは、弟子たちが訪問した時、サンダルの紐を解いて、更にその泥と埃とにまみれた足を、洗ってあげたのかも知れません。そうしないと、お客さんを家にいれることは出来ないしきたりでしたし、又、実際ほうぼうを巡り歩いてきた弟子たちの足は、汚かったことでありましょう。

　人がお客さんを招き入れる時には様々な思惑があることでしょう。当時、主イエスの弟子と名乗れば、人々はそれだけで好奇心をそそられて、弟子たちを家の中へ入れたのではないでしょうか。そんな中には、主イエスのことを探るために、疑いの心を抱きながらこの弟子たちとやり取りをした家もあったことでしょう。

　そのような、主イエスを受け入れない家の一つが今日の旧約聖書の箇所に具体的に描かれています。それはベテルという町です。アモスという預言者は、今、イスラエル北王国の都、ベテルの町にいます。アモスはもともと南王国ユダにいて、そこから行き巡ってきて、ここベテルの町に入れられているのです。そのベテルの町には当時、偶像崇拝が蔓延をしており、ベテルの祭司長アマツヤはアモスのことを、イスラエル北王国の王様ヤロブアムにざん言します。ところでアモスは、実は羊飼いであり、イチジク桑を栽培する農民でありました。なぜ一介の羊飼い、農民であるアモスがベテルにやってきたときに、祭司長アマツヤは、アモスを門前払いできなかったのでしょうか、アモスは、泥だらけ埃だらけの足でベテルの町に立ったことでしょう。ベテルの町というのは、立派な城壁で囲われた、チリ一つなくよく管理された、美しく飾られた町だったことでしょう。しかしその城壁を下げふりで点検される、主なる神の目には、そんなベテルの町の「あでやかさは欺き、美しさは空しい」と映ったに違いありません。

　そんな美しいベテルの町には、一介の羊飼い、農民であるアモスの泥まみれの姿は実に似つかわしくないことでしょう。、でもなぜかアモスは町の中にたち、そして、町の管理者である祭司長アマツヤとやり取りをしているのです。

　私たちは、ベテルの町のこの欺きのあでやかさ、むなしい美しさに思いをいたしましょう。ベテルの町の人々は、確かに、偶像を拝みながら、あでやかで美しい生活をしていたのかもしれません、神の目には一目瞭然ですが、その偽のあでやかさ美しさは、いつかはメッキがはがれて失われてしまうものです。　　そのことは町の人の目にもうすうすとは感じられることだったのかもしれません。

　今を生きる私たちも、あまりにも完璧で隙がない美しさには、かえって疑いの目を向けるのではないでしょうか。

　ベテルの町に現れたアモスの姿は、見た目には美しいところがなくて、足を見れば泥にまみれほこりにまみれているといった姿なのでした。ところが、ベテルの町の人々はそんなアモスの姿と、その口から語られる福音の言葉に、まことに救いを聞くことができたのかもしれません。

私たちは、このアモスの姿に、十字架上でぼろぼろにされ傷つけられて、血を流されている主イエスの姿を重ね合わせることができるでしょう。私たちの救いは、潔癖で完璧な美しさの中に見出されることはなく、このように、ぼろぼろになって、泥とほこりとにまみれた所に見出されるのです。私たちが、福音を聞く場所というのはそのように、人の目から見れば汚いと映るところですが、そこにこそ、神の愛の光が差し込んでくるのです。そうして、私たちは神の目から見た美しさ、それは山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足に現れていますが、その行き着く先が、シオンの娘、すなわち新しいエルサレムでのまことの美しさなのです。

　最後に私を信仰に導いた方のことをお話しさせていただきます。彼女は5年前に天に召されましたが、召される瞬間まで、枕辺に集った人に対して「キリストを知らせよ、キリストを知らせよ」と叫んでおられたような気がします。気がしますといったのは、その時、彼女はもう脳梗塞で、会話もできず、発話もできなくなっていたので、その語られた単語を聞き取れたわけではなかったからです。それは、呻き声で在り、体全体から発せらる気力の塊といったかんじのものでした。私は彼女がこのように自身はボロボロになりながら、こうして次の世代に福音を伝えて下さったことに、主なる神が認めるまことの美しさを見出しています。